

氏 名	内 藤 由佳子		
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	第 4623 号		
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者		
学 位 論 文 名	ドイツ新教育運動期におけるベルトールト・オットー の「協同体」形成とその実践に関する教授学的研究		
論文審査委員	主 査 教 授 細 井 克 彦	副主査 教 授 堀 内 達 夫	
	副主査 教 授 松 村 國 隆		

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ドイツ新教育運動期にベルトールト・オットー (Otto, Berthold, 1859 - 1933) が設立した学校 (Berthold Otto Schule 以下、オットー学校) における、「協同体」形成を基軸とした教育及びその思想の特質を明らかにすることを目的としている。オットーは 1906 年、ベルリンに自ら学校を設立し、「子どもから (Vom Kinde aus)」というドイツ新教育運動の中心的思想を「総合学習 (Gesamtunterricht)」として創造・展開した人物である。これまでのドイツ、日本における研究では、オットーを「総合学習」の創始者として、ドイツ新教育の主要な潮流のひとつに位置づけられてはいるものの、授業実践レベルでの考察がほとんどなされていないために、一面的な評価にとどまっていた。本論文では、オットーの著作とともにドイツにおいて調査・収集したオットー学校に関する貴重な授業記録を資料に用いて、子どもを教育の中心に置くオットーの教育の特徴を授業実践に即して明らかにすると同時に、オットー教育の再評価を行った。

まず、本論の概略は次の通りである。序章では、ドイツ、日本における先行研究を整理して、本論文の課題と方法を述べた。第 1 章から第 4 章までは、オットーの教育思想と彼が設立したオットー学校に関する授業実践の記録を初等教育段階に焦点を当てて分析した。第 5 章では、オットー学校の「総合学習」を取り入れることによって学校改革を実施したドイツマクデブルクの公立実験学校 (öffentliche Versuchsschule) の取り組みについて考察した。そして終章において、オットーの「協同体」に基礎を置く教育思想と授業実践に関する特質とその教授学的な意義を論じた。さらに、補論においては「ベルトールト・オットー教育協会 (Verein für Berthold Ottos Pädagogik e.V. 以下、オットー協会)」の活動を通じて、オットー学校とかかわりのあったハンブルク市「協同体学校 (Gemeinschaftsschule)」の「総合学習」実践について考察し、主論文の「総合学習」と「協同体」形成の教育的な広がりを捉えた。以上の構成に基づき、論文の概要を述べる。

第 1 章では、オットーが自ら学校を設立するにいたる背景を、当時の都市、学校教育の状況から検討している。まず、第 1 節で 19 世紀末から 20 世紀初頭のドイツ都市部における産業化と人口の過密化の状況について概観し、産業化に伴う物質主義の原理が学校教育にも影響を及ぼしていたことを述べた。第 2 節では、ベルリン市の民衆学校を取り上げ、当時の学校教育における指導観が教師の側の「教授」に重点が置かれ、子どもの主体的な「学び」という視点が看過されていたことを指摘した。第 3 節では、オットーが自ら学校を設立する契機となった当時の学校教育に対する批判点を整理してまとめた。オットーは、当時の学校教育が暗誦を中心とする機械的、注入的な方法で授業を展開していた点、そして教師が子どもの内発的な「認識衝動 (der Erkenntnistrieb)」やそこから生じる発達の可能性を考慮していない点を鋭く批判し、都市における新たな学校改革に着手するまでの経緯を明らかにした。

第 2 章では、オットーが旧教育への批判に基づいて 1906 年にオットー学校を設立した直接的な経緯、学校の

概要と指導原則を明らかにするとともに、新たなカリキュラム・デザインの視点からオットー学校における学びの構造と特質を明らかにした。第1節では、オットーの教育思想が地域住民の学校改革への要求と呼応し、保護者、地域との相互協同関係に基づいた初等中等学校として、オットー学校が設立されたことを述べた。オットー学校では、学校内に子どもと教師との協同関係を形成することを意図し、教科学習と平行して「総合学習」を組織していた点が重要である。第2節では、オットー学校の指導原則としてオットーが提唱していた「自然的学习 (Natürlicher Unterricht)」の理論を取り上げて、そこでの子ども観と教師の果すべき役割を明らかにした。すなわち、子どもは「自ら主体的に学ぶ存在」と捉えられ教師は精神的交流に基づく対話によって子どもの学習環境を柔軟に構想するものと期待された。第3節では、オットー学校における子どもの側からのカリキュラム構想について考察し、その思想的な源流を探った。そして、オットーが、カリキュラムを「固定的な型」ではなく、「学びの軌跡」として捉えなおし、授業実践のレベルからカリキュラムをデザインすることで、カリキュラムを構想していた点は特筆に値する。

第3章では、オットー学校の授業実践において中心的な位置を占める「総合学習」の具体的な内容と意義について考察し、併せて、オットー学校における「協同体」形成のあり方を明らかにした。第1節では「全学年の総合学習」と低学年の「コースの総合学習」の授業実践を分析した。「全学年の総合学習」では、異年齢集団における思考や興味の異質性、多様性が尊重され、対話に基づく「思考協同体 (Denkgemeinschaft)」の形成が目指された。「コースの総合学習」では、子どもの現実から出発したテーマが設定され、授業の計画、調査、実施、評価に子どもが主体的にかかわる「プロジェクト」が展開されていた。そこでは、教科の枠を超えた「学習協同体 (Arbeitsgemeinschaft)」の形成が目指された。第3節では、「自治活動としての総合学習」の授業実践を検討した。「総合学習」は、まず知の総合化とともに自他の経験や認識を再構成する役割を持つ。さらに、自治的な生徒組織の活動がそこに展開されていた。校則や学習規律は子どもの話し合いで決められるなど、年齢や立場の相違を乗り越えて、相互主体的な関係性の構築が目指された。

第4章では、オットー学校・低学年の具体的な授業実践について、オットー学校発行の学校機関誌(1908-1932年)に掲載されていたプロトコルを主な分析素材として詳細に検討した。第1節では、低学年・入門コース(6～7歳)のカリキュラムと授業実践を分析した。オットー学校の低学年・入門コースでは、「コースの総合学習」の前段階として「基礎的学习 (Anfangsunterricht)」が実施された。「基礎的学习」は、「遊び」を活動の中心に据え、「活動—対話—表現」をひとつの単位とした多層的な学びを含んでいた。ここでは「協同体」形成の前段階として、仲間意識や帰属意識を喚起する「遊び集団 (Spielgenossenschaft)」の形成が目指されていた。さらに、教師が子どもの学びを丹念に記録することを通じて「観察 - 反省 - 構想 - 探求的实践 - 修正」という流れでこの授業が構想されており、それらは、絶えずフィードバックされることで、反省的で創造的なカリキュラム・デザインがなされていたといえる。第2節では、低学年・下級コース(8～9歳)のカリキュラムと授業実践を検討した。オットー学校の低学年・下級コースでは、「基礎的学习」が「コースの総合学習」へと発展し、「全学年の総合学習」の他に教科の授業が行われ、教科の授業時間数は公立学校と同等の時間数を維持しており、教科における系統的な学びも決して軽視されてはいなかったことがわかる。「算術 (Rechnen)」の授業では、異年齢集団での学びが組織され、教科内の領域が取り払われるなど総合的な算術が志向され、かつプロジェクト的な展開がなされた。また、教科学習における教師の指導性を吟味するために、同時代のわが国において、オットーの教育理論に示唆を受けた奈良女子高等師範学校附属小学校の実践を比較参照した。

第5章では、「総合学習」に焦点を当て、オットーの教育思想と授業実践が他州の公立学校教師に受容され、波及していく過程について考察した。第1節では、オットーの教育思想に共鳴する公立学校の教師による「オットー協会」の設立過程とその活動内容に言及した。協会員の活動の目的は、個人崇拜的な模倣ではなく、オットーの教育思想を一般化し得る視点を具体的に見いだすことにあった。第2節では、マクデブルクのオットー協会の活動を取り上げ、オットーの教育思想に基づいた公立実験学校設立と初等中等段階における学校改革

の過程を描き出した。マクデブルクの公立実験学校は、オットーの「総合学習」を授業の中核に置き、総合学習を時間枠としてのみ設定するのではなく、教育方法、カリキュラム・デザインの視点から受容した点に特色があり、「子どもから」の新教育を実現する契機ともなった。

終章では、具体的な授業実践から導き出されたオットーの教育思想の実際とその意義を論じて、オットーの教育について再評価を行った。オットーの教育思想は、これまで無秩序な自由に基づいた放任的な授業であると見なされてきた。しかし、具体的な授業記録を分析することによって、子どもの内発的な興味を重視しながらも、教師の指導性を後退させることなく、豊かな学びが実現できるものであったと評価できる。そして、オットー学校における教育実践の中核に位置したのが「協同体」概念に基づいた「総合学習」であり、これは、私的で限定的な学校のみで実現可能な実践ではなく、公立の実験学校においても広く一般化され得る現実的な学校改革への取り組みであった。こうしたオットーの教育思想は、現代の教授学的アプローチから見ても、なお新しい学習指導のあり方の探求に有意な示唆を与えるものと評価できる。

最後に、補論では、「オットー協会」を通じてオットーの授業実践と関係したハンブルク市の協同体学校の実践を「総合学習」に焦点を当てて分析することによって、学校における「協同体」形成の教育的な広がりを実証的に把握し、かつその教授学的意義を補完した。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、ドイツ新教育運動期にあって、先駆的な「合科教授」ないし「総合学習 (Gesamutunterricht)」を編成したことで知られるペルトールト・オットーの教育理論とその実践に関する実証的な研究である。ドイツ新教育に関する国内外の先行研究は比較的多い。本論文は、ドイツ語圏諸国における先行研究を広く把握し、また日本における先行研究に見られる問題点を鋭く指摘して、オットー学校で実践された教育の体系とその波及に関する再評価を当時の実践記録や雑誌資料等の分析に基づいて手堅く行っている。以下、全5章及び補論からなる本論文の要旨に基づいて行われた審査の結果について概述する。

序章では、先行研究として代表的な改革教育学者 H. ノール、W. シャイベ等及び日本のドイツ教育史家によるオットー教育の評価が、一面的ないし概括的なものに留まっている問題点を指摘して、研究課題を明瞭に設定している。その際、オットー学校における教育の中心に位置する「総合学習」と他の授業との関係、子どもと教師の関係を規定する多層的な「協同体 (Gemeinschaft)」に着目することによって、その独自の教育体系が的確に把握されている。

第1章では、19世紀末前後のプロイセン・ドイツにおいて、学校教育が画一的で権威主義的であることをベルリン国民学校を事例に挙げて論証している。そして、オットーが形式主義的なヘルバルト派教育学を批判し、またドイツ新教育の旗手たる H. リーツによる田園教育舎とは異なる都市型の協同体学校を志向していた点を明らかにしている。

第2章では、ベルリンに開設されたオットー学校におけるカリキュラムの構造とその特徴を明らかにしている。すなわち、総合学習、教科学習、自治活動という3つの学習活動からなるカリキュラムは、異年齢のコース別によって編成されている。そして、子どもの自発的な学習を助けるために、「自然的学習」という事物を基礎とする問いと対話の学習を基本的原理とした点に注目する。これまでの先行研究においてしばしば看過されてきた教師の指導性については、この原理に基づく活動を促進するための環境づくり及び自発的な対話学習を誘発する働きかけの工夫にその要点がある。とくに環境の連続性を確保するためには学校と家庭との連携が不可欠であり、教師と親との協同は、田園では実現が困難な都市型の協同体学校像を示しており、その体系的把握は本論文における独創性を内包するものと評価できる。また、カリキュラムの概念について、固定的なレーアプラン (Lahrplan) ではなく、学習の観察、反省などを含む学習の軌跡として、レーアガング (Lehrgang) をオットーが多用していたという興味深い事実を指摘している。

第3章では、「協同体」形成において重要な役割を担う「総合学習」が、オットー教育の優れて特徴的な授業であることを明らかにしている。この総合学習でも前章で述べられた学習原理が貫かれている。すなわち、子どもの問いと自由な対話を基礎にして、全体とコース別の総合学習がそれぞれ展開する。これら「思考協同体」並びに「学習協同体」に、教師による支援と子どもの自治活動、そして家庭との交流が介在する有機的なシステムが形成されており注目に値する。

第4章では、とくに低学年の授業実践に焦点を当てて、教師の指導性について検討している。オットーの娘であり、オットーの感化を受けてきた教師イルムガルトが残した実践記録を丹念に分析することによって、観察、省察、構想、探求的实践、修正の過程からなるカリキュラム・デザインが典型的に示された事例として論証されている。また、同時代的な比較の観点から、先駆的な「合科教授」を導入した奈良女子高等師範学校附属小学校の授業実践が検討され、オットー学校に類する教育が日本でも試みられていたことを明らかにした。

第5章及び補論では、オットー学校の教育、とくに「総合学習」がオットー協会を媒介として公立学校へ波及する過程を明らかにしている。その中でも、マクデブルク実験学校及びハンプルク協同体学校（テレマン街学校）を取り上げて、オットー教育が波及した成功例として検証している。

本論文は、オットー教育に関する教授学的な再評価及び公立学校への伝播に関して、実践記録や雑誌資料等に基づく実証的な手法により、説得力をもつ結論が導き出されていると評価できる。ドイツ新教育の中で、オットー学校の教育は、主知主義に対抗する作業主義、芸術主義とは明らかに異なる思潮に位置している。今後の課題として、オットー教育がその多彩な新教育の広がりにも果たした役割や意義について、また戦後の事実教授、総合学習に繋がる歴史的な研究の発展が望まれる。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。